

## 第5章 報道がスクープされた

12月7日早朝の太平洋の静寂を破った爆弾はアメリカ人を目覚め、彼らは日本と戦争をしている事実に気づいた。彼らのうち、日本が既にしばらく前から、アメリカと戦争状態になっていたのを知っていた者はほとんどいなかった。日本がアメリカへの爆弾投下を開始し、この奇襲攻撃にアメリカはあ然としたが、これは一日で達成されたわけではなかった。

日本は中国で10年以上、爆撃を拡大してきたが、それより前から、日本は狡猾に米国と取り組んできた。この狡猾さは捉えにくかったにも関わらず有効だった。既に述べたとおり、貿易で日本の柔らかい絹は合衆国の硬い金属と交換された。この金属は兵器に変わり、復讐として戻って来た。広報活動では国家によって腐敗され、迫害された報道機関から情報を提供し、その交換に、比較的適正で自由な報道機関からの情報を手に入れた。日本は米国から貿易と情報によって手に入れた全てを、征服と支配計画を促進するために利用した。その代わりに、日本から提供されたもの全てが、将来、敵を軟化し、混乱させることになることを願っていた。

日本は出版の自由を情熱的に支援しているが、自国については除外していた。勤勉な日本特派員はニューヨーク、ワシントン、ロンドンでの豊富な新聞からの重要な情報を一滴残さず吸い上げている一方で、東京の新聞は外国の報道機関には混乱した迷路を提供し、価値のある情報を提供することは殆どなかった。誰もが、それぞれの好みに合わせた、様々な記事が掲載された。日本は自国の強さを自慢しようとも、自国の弱さを明らかにしようともしなかった。これらはアメリカと英国の報道に任せた。東京にいる特派員は事実情報には枯渇していたが、にわかに景気づく工業都市の工場での予測についての統計的な情報では困ることは殆どなかった。もし、世界が、日本が中国と四年間の戦争をして、疲弊しているに違いないと思っていたのならば、日本にとっては、それはそれで好都合だ。是非とも、そう思い続けられればいい。それは、他国で戦争が起こればそれから四年後に感じるであろうことの反映なのだろうか。もしそうなら、日本の不屈の精神をこれ以上に称賛できるものはあるだろうか。これが、日本は崩壊直前だとする外国の報道を読みながら、微笑みながら沈黙する、真剣な日本人の一般的な態度だった。

極東からアメリカと英国のライターは帰国して、世界で常にうすうす感じられていることを確信させる。それは、日本の足は粘土で、体は紙と木製から出来ているということだ。アンクル・サムの指のスナップか、英国帝国のライオンの尻尾がヒュッと動いて鳴り響くことで、全てが崩壊する。アメリカと英国の民衆は喜んだ。これらの本の売り上げは伸びた。読者はずっとそうだと知ってはいたが、これを再度確認し、中国のアメリカと英国の所有物への「偶発的な」爆撃と天津での英国への厚かましい侮辱といった、複数の衝撃的な出来事の後であ

ったが、再び安眠の日に戻りたいと思っていた。

日本人も喜んでいて、アメリカと英国のライターは彼らからの祝福を受けた。日本は民主主義諸国に武力で訴えるつもりはないと何度も主張してきたが、ライターは日本に実行可能なかを調べ、確認しようとはしなかったのか。東京には、米国と英国への宣伝活動員として、帰国して「日本の真相」を明らかにする善意な反日ライターほど優れた者はいなかった。外国からの疑惑を清算するには、日本のプロパガンダを流して東京では平和的な政策を行っていることを示すよりも、彼らの文書の方がより有効だった。ある英国ライターによる日本の「神話」の暴露本は日本国民には公表されなかったが、東京の外国人には国際文化振興会の図書館に行けば読むことが出来た。国際文化振興会は政府によって助成されていたプロパガンダ機関で、ニューヨークでも同様な図書館を運営していた。

反日と親日のプロパガンダ間の無意識的なネットワークが有効だった。このことで、誤った安心感が生まれ、民主主義諸国は攻撃されやすくなった。国会にグアムを要塞化する法案が提出された時、日本によって管理されている新聞ははっきりと憤りを発した。グアムの要塞は脅威であり、日本の心臓部を狙っていると新聞は叫んだ。公式な報道官は「深刻な懸念」だと発表し、日本は「対抗策」を考慮することになる可能性があるとして脅迫的に警告した。このはったりは有効だった。敏感な国の感情を害することをためらっていた国会はこの法案を見送った。国会では日本の供給源は中国との戦争で「疲弊」しているとの記事を読み直すことができた。太平洋では戦争は起こらず、従って、グアムを要塞化して、弱い国を刺激する意味がないこととなった。日本の報道官は喜びを表明した。日本の陸軍と特に海軍も喜びを示した。すべてが歓喜を表明している一方で、軍国主義者は委任統治の島々と他の太平洋の前哨基地の要塞化を進めた。もちろん、太平洋に戦争は起こらない。アメリカがやるべきことは撤退を続けることだけだった！

日本は東京での企みが不必要に流出されることで、民主主義諸国に疑いを持たれたり、彼らのヨーロッパ戦争への没頭を邪魔したりしたくはなかった。日本は外国人特派員が入手可能な情報源を縮小することを決めた。外国人特派員は軍事、海軍、外務大臣には最も関心があったが、それぞれの大臣は各々の情報局を持ち、そこに新聞記者は取材に行くことが出来るようになっていた。しかし、これらの大臣の職務の重要性が高まり、それまで疑われていた日本は詮索したがる外国人をこれらの省庁から遠ざけたほうが賢明だと考えた。さらに、異なった省庁からの話が必ずしも一致せず、日本は情報を「中央集権化」する時期だと考えた。内容は単純化された。外務省と陸軍省が入っている薄暗い木造の兵舎と海軍省の頑丈な煉瓦造りの建物を訪ねることは記者にとっては面倒だったが、その代わりに、情報源に触れるためには一カ所に中央化された。しかし、この中心化された機関は内閣情報局と呼ばれ、

中身はなかった。特派員は政府の異なった情報局からは時々、情報を得ることがあったが、中央化された情報局からは何も得られないと確信した。内閣情報局はかつての劇場 (\*\*帝国劇場) を庁舎にして、無意味なドラマを上演しているようだった。

ナチスの宣伝省をモデルとした情報局は自国と外国での全プロパガンダを運営することになった。情報局の総裁には小柄で、皮肉を言う伊藤述史博士がなった。温厚な性格で、殆ど禿げた小さな紳士の伊藤はヨーロッパで多くを吸収したキャリア組の外交官の一人で、彼はパリとジェノバで長期に勤務したことで、特にフランス文化を多く吸収した。彼のフランス語会話は完璧で、英会話よりも素晴らしかった。国内の極端なナショナリズムの高まりで、国際連盟と密接に関係があった外交官たちは「古い秩序」に汚染されたとみなされ、失墜した。伊藤もその一人で、しばらくの間はひっそりとしていた。しかし、情報局が設立され、長年、ヨーロッパ大陸で経験してきた伊藤が最善な責任者だと考えられた。世に知られなくなっていた彼は、軍国主義者の世間体の立派な表看板として引っ張り出された。しかし、伊藤は外国人特派員と直接関わることは殆どなかった。この仕事は内気で誠実な外務省の官僚の石井康に任された。

石井は笑顔で心優しい報道官で、以前はニューヨークで参事官をやっており、そこには多くの友人がいる。週に二回、午前 10 時ごろに外国人特派員のための会見が開催され、彼は満員の記者室にもったいぶって入って来ると、長いテーブルの真ん中に座り、新聞記者と対面するのだった。彼の両側には、少なくとも 1 ダースの補佐が配列された。陽気に「皆さん、おはよう」とあいさつをした後、石井は一杯の黒茶に角砂糖を二つ入れて、かき回しながら、考え込んだ様子で、コップを凝視し、誰かが何かを言うのを待つのがだった。カップから顔を上げると喜色満面で「今日は質問はないですか、皆さん？」と聞くのがだった。たくさんの質問があったが、石井がにっこり笑うのは、答えるつもりはないか、答えられないことを示すサインだった。日本とアメリカでの戦争の勃発前に日本とアメリカでの交渉は何回か行われていた。しかし、石井はこれらの質問に答えたことはなかった。新聞記者は茶を飲むと、かび臭い劇場からぞろぞろと出てくるのがだった。外務省管轄の英字日刊紙 *ジャパントイムズ・アドバイザー* にはこの会見について「外国人特派員による記載無し」と記載されるのがだった。

この記載は、このような特別な会見の時だけではなく、ほぼ全てがこの記載だった。政府のこの一元化された機関設立の目的は、特派員には「記載なし」以上は与えないことだった。そしてその目的がある程度以上の成功を取めたことは認めざるを得なかった。情報局のメンバーは日本の指導者の意図について何も知られず、それは報道機関の代表者と同様だった。石井は報道機関のために情報を収獲しようと、外務省に週に何回か精神的に出かけるのがだった。しかし彼は政府高官のところに詰め寄る日本の新聞記者と同様な部類だと見なされ

た。彼は厄介者だと見なされた。外務省は少し丘の上にある、だだっ広い、火災の時には逃げ口の無い建物にあった。ここから中心部の情報局が入っている劇場へと送り返されるのだが、殆ど新たな情報を得ることはなかった。

このことで石井の状況は気まづくなった。日本人でしか見られない、少女のような、非常に繊細で内気な石井は、彼に任せられる政府からの情報がほとんどない理由を外国人特派員が分かっているに気が始めた。陸軍も海軍も彼には全く情報を与えようとはしなかった。帝国陸海軍が責任を負うのは政府ではなく、天皇に対してのみであり、石井のような、外務省出身者が、帝国陸海軍についていかなることも、語ったり、知ったりするとは、大日本帝国の原則に反していた。しかし、記者会見に陸軍と海軍の将官が出席し、防衛事業についての問題が上がった時には、言及することは認めた。穏やかな顔をした彼らは、記者会見に貢献することは全くなく、しばしば欠席した。

従って、石井報道官はいろんなところに行ってほんの少しの情報を収集することに尽力し、外国新聞記者の前であまり「面目」を失わないようにしていた。たとえ彼が何かを話し始めても、それが失言のように聞こえ、彼の補佐が彼を黙らせるので、最後まで発表することが出来ないことがしばしばあった。記者会見では常に石井の両側を補佐が守り、その厳粛な表情が彼らの仕事である「補佐」が如何に重大なのかを表していた。彼らはそこで、石井が彼の誠実さで国の計画をひっくり返すことが無いよう見守っていた。報道官が何か不適切な発言をすれば、その責任は、沈黙させることが重要な監視者にも報道官と同じように負わされることになっていた。彼らが石井報道官の会話に聞き耳を立てているのは自然なことで、もし重要な失言があれば、それは減俸と降格されることを意味していた。

しかし、特派員が石井を問い詰めると、石井は補佐官と相談した上で、時折、告白することもあった。ある記者会見で、津軽海峡と宗谷海峡の自由水域について質問されたときがそれだった。日本本土と北海道、サハリンを隔てるこの二つの海峡のうちの一つを、米国からウラジオストクへ軍需品を運ぶ船が通ろうとしていた。当時、日本の姿勢が国際的に大きな関心を集めていた。日本がこれらの海峡を封鎖してソ連への輸送を止めようとするのではないかとの懸念があったからだ。そこで私は、記者会見で、1904年から1905年の戦争後に日本とロシアが締結し、ソ連革命後に再確認されたポーツマス条約の条項を逐語的に読み上げた。その条項では、日本が津軽海峡と宗谷海峡を国際水域とみなし、第三国の貿易に開放すると規定されていた。

この質問は慎重に対応する必要があった。ポーツマス条約は現在も有効であり、日本は独ソ戦争では中立的な立場だと表明していた。従って、表向きは日本の友好国との条約を石井が非難することは出来なかった。同時に、石井はこれまで何回も記者会見で、アメリカからウ

ラジオストックに軍需品が輸送されることは、日本にとって「脅威」であり、極めて重要な「懸念事項」であると述べていた。そこで、いつものように、報道官が回答に困った時のコメディアーが上演された。報道官の周りに助言者がすべて集まり、円陣が出来た。彼らのうち一人は法律の経験者らしく、石井にラテン語のフレーズを渡した。そして、そのフレーズが回答で出てきた。「日本の国際的な取り決めの順守は *rebus sic stantibus*（事情変更）の原則に基づいている。」と彼は言った。

#### (\*\**Clausula rebus sic stantibus* 事情変更の原則

契約締結時に前提とされた事情がその後大きく変化し、当初の契約どおりに履行させることが当事者間の公平に反する結果となる場合に契約の解除や契約の改定を認める法原理。wikipedia)

これはニュースだった。これは、日本政府は誓約をその締結時から国際状況が変わっていない期間のみ有効とすることを意味する。石井と補佐はこの時、国際法からの見方を考えていなかったが、この声明は国際法に廃止通告をすることに備した。もし、10年間の合意が結ばれたとすると、彼の声明に則ると、日本が自国の状況が変化していると判断したら、この合意を自由に破棄することとなる。石井の声明は時期的に特に重要だった。なぜなら、このことで、日本は、建前上は友好国との約束を破棄し、ポーツマス条約の条項を自由に無視することを考えていると公式に声明することになる。この重要性はさらに拡大される。もし、ドイツ、イタリアとの新たな10年間の三国同盟にも適応されれば、日本は国際状況が変われば、この枢軸国を自由に見捨てようとしていることになる。そして国際状況は日々変化していた。この声明は日本の国際契約に対する本質的な姿勢を厳密に述べたものであり、これは、石井がいつもの会話の時と同じように、政府が思っていることを、正直に、そして、率直に述べたからこそ出てきたのである。

この会見が終わって、アメリカ人特派員は、ニューヨークの朝刊に載せるためにいつもよりもかなり早く事務所へと歩いた。(道路でタクシーを探すのは既にできなくなっていた。)しかし、情報局から、殆どのアメリカ人特派員の事務所が入っている同盟ビルまでの5分間に、石井と彼の集団は彼らの告白の重要性に気が付いた。この発言が報道されれば、海外の都市は、枢軸国だろうが非枢軸国だろうが、驚いていただろう。これは阻止する必要がある、すぐに阻止された。

有効な管理システムが既に完成していた。必要なものは全て、本部に電話をかける必要があり、東京から国外への情報は遮断出来るようになっていた。私は、同盟ビルに着いて、数分で送信する記事を書き上げた。海外に電報を送るには、中心電話局に電話をかけて、記事を

読むのが通例になっていた。ニューヨークのヘラルド・トリビューンに通信する前に電話をかけて、最初の一文を読むと、電話に出た検閲官から待つようにと言われ、これも慣例だった。彼は顧問委員会に相談する必要がある、その助言者数の多さは、恐らく、石井が発言する場合と同じだったであろう。

数分後に彼から電話がかかってきて、最初の段落を再度読むように言われた。以下の通り読んだ。「本日、日本が国際法への新たな解釈を発表した。石井康政府報道官が外国人特派員に、日本の国際的な取り決めへの順守は締結時の国際状況が維持されているかに依存すると述べた。」これは、石井が *rebus sic stantibus* のフレーズの意味を説明した際に喋ったことを、殆ど、一字一句変えていなかった。「石井さんはこんなことを言ったのですか？」と検閲官が彼のゆっくりした英語で尋ねた。私は彼がそう言ったと答えた。「これは良くない。記事から削除してください」と即答された。

なされたことは明らかだった。これまでも、同じことはこれまでも何回かあった。この発言に緊張した情報局は、これが国外に送信されることを阻止することを決めた。そして、電話と無線の検閲官に記事の送信中止を要請した。国際電話の使用には、検閲官が無線のコピーの場合のどこを削除しているかを知ることが出来るという数少ない利点があった。ほとんどの特派員は電話ではなく、無線を使用しており、彼らは検閲官と接触することはなく、従って、何が切除されているのか知ることが出来なかった。

しかし、電話には利点よりも欠点の方が多かった。当局は特派員がニュースの送信方法として電話を使用するのをやめさせるために、電話使用時に障害を設定する政策を採用した。電話では何らかの方法で厳しい検閲が回避される恐れがあったからである。彼らは特派員には無線のみを使用して欲しかった。無線の場合はそれを電報局が受信し、ファイル化され、検閲官が書面を読むことになる。日本人は英語を聞くよりも読む方にはるかに得意である。学校での訓練のほとんどは、読み方のみに限られている。彼らが聞くのは日本人教師によるアクセントが乏しい英語がほとんどで、イギリス人やアメリカ人が英語を喋ってもほとんどの日本人はそれを理解するのが難しい。従って、検閲官は書かれた場合は確実に削除している記事が、電話で言われるとそのフレーズや文章を聞き逃すことが多かった。

アメリカ人特派員に電話使用をやめさせるために二つの方法が使われた。一つは新しい記事の認可はニューヨークでの新聞の編集締め切りには完全に遅れるまで待たせ、二つめは法外な費用を請求した。1940年の後期までは電話でのサービスはそれほど悪くはなかった。待たされたのは一〜二時間だったが、接続はしてくれた。最初の電話の向こうの検閲官はアメリカ生まれの日本人で英語を完全に理解し、新たな記事を許可するかは、多くを自分自身で判断していた。しかし、情報局の発足により、ニュースの情報源は全面的に締め付けられ、

電話局の検閲システムは大々的に入れ替えられた。この時に新たな検閲官である丸山氏が私の生活に入ってきた。彼との一年間の電話での口論とフラストレーションは最も不幸な夫婦が携わってきたようなものだった。私は、最終的には離婚して、無線を使用せざるを得なかった。

私は丸山氏に会ったことは一度もないし、それが本名だったかどうかさえわからない。しかし、ヘラルド・トリビューン紙にレポートするために電話を定期的に使っていたため、重要なニュースが明らかに進展しているときは週に数回、時には毎日、丸山氏に話しかけた。私たちはついにお互いをよく知るようになり、お互いの生計手段に心から嫌悪感を抱くようになった。なによりも、彼の英語は下手だった。おそらくそれが、彼がアメリカ生まれの日本人と交代することに躊躇した理由だろう。前の検閲官は英語が容易に理解できるため、検閲が速かった。彼の場合は、文章と単語を繰り返さないと、意味を理解することが出来なかった。私が丸山氏に英語のレッスンを数回すれば、時間を節約できるかもしれないと思った。これを念頭に置いて、いつか昼食を一緒に行こうと提案した。彼は電話で私に感謝し、それから謝罪したが、その声には笑いがあった。私が彼や他の検閲官に会うことは規則違反だ、と彼は説明した。私たちはお互いの声しか知らない運命なのだ。私たちは、気づかないうちに東京の街中で何度もすれ違ったことがあるのかもしれない。

彼の英語は私たちの頻繁な会話で上達し、そのことで検閲が厳しくなった。私はニューヨークにいる日本人特派員は自由に東京に電話をかけることが出来ることを挙げ、東京での検閲について、しばしば強く抗議した。しかし、彼はそれに対しては上手い回答を持っていた。彼は、あなたが今いるのは日本でニューヨークではないと笑うのだった。厳密に言えば、日本が、ニュースが電話か電報で送られるのを検閲するのは国際通信の協定に違反しており、最後の最後まで日本は検閲を行っていることを公式に認めようとはしなかった。しかし、アメリカ政府が報復できていないことで、日本はこれを素晴らしい取り決めだと判断し、アメリカから日本へのメッセージは全て検閲なく受信し、日本はアメリカからのメッセージを全て検閲した。1941年の夏には検閲はさらに強化され、重要で進展した出来事を一つのレポートに書くのはほとんどできなくなった。千単語以内の記事が検閲されるのに三〜四時間がかかった。時々、午後になっても検閲の結果が出ず、ニューヨークと東京間の昼間の電話時間が終わった。7月に第二次近衛内閣が解散になった時、私は当時、外務大臣だった松岡洋右が内閣から離任されたことについて長い記事を提出した。三時間後に検閲官は、内閣解散についての公式な説明に使われたいくつかの文章を除き、それ以外は全てニューヨークに送ることは出来ないと告知した。

検閲官との関係はアメリカと日本の政府との関係に比例して悪化しているようだった。抗議

しても無駄だった。私は検閲官に少なくとも新聞の編集期限までに間に合うよう早く審査するように要求した。丸山氏は遺憾の意を示しながら時間がかかるのは自分ではなく上司に原因があると説明した。知り得たことから推測すると、検閲局は拡大されているようだった。国外への送信に対応する検閲官が増えたことで、何を許可するかを判定するまでに時間がかかるようになった。彼らのナショナリズムが高まり、ニュース記事の審査時に敵意が強まった。さらに、遅くなるのは、ニューヨークへの会話の許可が承認される前に、検閲に送られた全メッセージを記録し、これらを翻訳し、さらに検閲するというシステムの問題があった。

全ての検閲問題が最高潮に達したのは7月末だった。この時、重慶で米ツツイラ号小型砲艦への爆撃があり、これに対してジョセフ・C・グルー米全権大使による怒りの抗議申し立てと、日本の外務大臣の豊田貞次郎大将による遺憾の意があったが、いずれも米国に送信することを検閲官は電話でも無線でも認めなかった。アメリカ人特派員は初めて集団で過度の検閲に対して苦情を申し立てた。彼らはグルー全権大使と大使館の当局者と接触し、大使に代わって外務省に6時間の間に三回の抗議をした。職員は状況下で可能の限り外交的に話し、東京での遺憾表明についての報道をアメリカ国民に隠蔽することの愚かさを指摘した。彼らは過度に熱心な検閲官が、爆撃については既に重慶から世界に発表がなされているのに、愚かにも、爆撃の報道は阻止すべきだと信じていたが、彼らがやっていることは日本からの遺憾発表を阻止することになっており、これは単にアメリカの敵意を増しているだけだと指摘した。

日本はようやく事情を飲み込んだが、それは二回の締め切り後と、AP通信のマックス・ヒルとUP通信社のロバート・ベレアが通常の2倍の料金で一連の緊急メッセージを電信局に送り、そこで止まってからだった。電話をかけるには遅すぎた。ニューヨークへの回線はすでに閉鎖されていたが、その夜に使用したい特派員のために、無線電話ビームをヨーロッパからアメリカに切り替える特別な手配が行われた。

最も大和魂を傷つけるのは罪の自白である。神道の神への信仰によって、日本人は自分には悪いことはないと強く信じているように見える。日本人の多くの態度の背後に、この絶対確実性への信念が存在する。ツツイラ号が爆破されそうになったら、それはツツイラ号の責任であって、日本の爆撃機によるものではないに違いない。小型砲艦ツツイラが居てはならないところに居たからだ！仮に殺人罪で有罪判決となった日本人が控訴を取り下げた場合、それは罪悪感からであることは稀で、殆どは便宜上の理由である。これはツツイラ号周辺に繰り返された爆撃の件でも見ることが出来る。(小型砲艦に命中しなかったのは日本にスキルが欠如していたからではなく、スキルがあったからである。) 外務省が全権大使に遺憾の意



を表明したのは罪の意識があるからではなく、解決に至らなかった場合の報復の代償を理解したからである。彼らは事件に対して謝ってはいなかった。謝罪とは罪を意識することだが、日本人は自分自身に罪があることを認めようとはしなかった。彼らに出来るのは謝罪を表明し、起こったことに対して申し訳なかったと述べ、賠償金を支払うと申し出るだけだ。彼らは損害を引き起こしたことへの罪の意識を受け入れるよりは、損害を修復するための金額をほぼ完全に支払うであろう。パナイ号砲艦爆撃後に数千の日本人が犠牲者に哀悼の意を表した。彼らは遺族の慰めのためにどんなことでもするだろう。しかし、彼らの多くが攻撃について罪悪感を持っていたかに関しては疑わしい。

この心理は日本の一部の検閲に潜んでいる。ツツイラ号事件に関する記事と公式の謝罪の表明は、日本国内では出版禁止となったが、強力な政府措置の後、海外に送ることは許可された。この国の支配者たちは、合衆国に謝罪を表明するのは、死を捧げる天皇の使者である日本の飛行士の過ちで事件が起こったことを認めること意味し、日本国民に、このような間違った結論に至らせるつもりはなかった。天皇が過ちを犯すことはあり得ない。天皇は絶対無欠である。翼のある殺し屋たちも同様である。

抗議と謝罪の応酬の翌日、石井報道官は、笑顔の輪をきれいに作った顔で記者会見場に現れた。その笑顔は、緊張を隠し、頬とまぶたの赤みを和らげるのに役立った。日本人が悲しみや恐怖で動揺すると、公の場では、微笑み、さらには笑うのが自然な反応だ。石井報道官は、この記者会見の間ずっと、懸命に微笑み続けた。彼は外務省から戻ったばかりで、そこでアメリカ政府がツツイラ号事件をいかに深刻に受け止めているかを聞かされた。彼は、グルー大使から外務大臣に送られたものは、これまでアメリカから日本に送られたもののうち、最後通告に近い警告だったことを聞いた。大使は、事実上、ツツイラ号のような事件が再び起こった場合、アメリカと日本の関係がその衝撃を乗り越えられるかどうか疑わしいと述べた。彼の意味は極めて明白だった。それは、このままなら、アメリカは日本との外交関係を断つかもしいかもしれないということの意味していた。この警告が出された1941年夏、日本はまだ対米戦争の準備を完了していなかった。グルー大使の警告の申し込みは日本にとって大きな衝撃であり、石井報道官は記者会見で失言を犯さないようにと命じられた。同時に、弱みを見せないようにとも命じられた。というのも、ちょうどこの頃、近衛首相はルーズベルト大統領との最終交渉を開始して合意を得ようとしていたからである。したがって、石井報道官は事実上何も言わず、できるだけ早く会見を終えるという基本方針に従った。

ツツイラ号事件についてのコメントを求められたときに、石井は、それは小さい出来事で、たいした重要ではなく、損害もたいしたことはなく、合意は既に行われ、事件は終了しており、忘れるのが一番だと述べて、笑い飛ばした。これは罪を認めることを隠蔽し、拒否する

典型的なやり方で、これを見れば、外務省と情報局は実際には如何なるものだったのかわかる。それは帝国陸海軍の悪にうわべを飾った機関だったのだ。何人かが「それほど小さな事件で、影響がなかったのなら、なぜ、検閲官は五時間以上も記事の送信を阻止し、日本では報道禁止になっているのか」と質問した。石井は驚いていた。彼は出来事の全てを知られてはいなかった。彼は「何かの間違いがあったのに違いない」と説明した。彼は推測として「検閲官は恐らく、国内での記事の報道禁止が国外にも適応されると誤解したのだろう」と述べた。これは最悪だった。国内の報道禁止については、日米関係は微妙な状態で、政府は日本国民の敏感な感情を刺激したくはなかった。報道官の話を聞いていると、皮肉にも、彼の日本の軍国主義者の無謀さを国民に知らせようとしぬ論拠は、議会でのグアム要塞化法案の否決で使われたものと殆ど同じだった。日本の報道官もアメリカ議会も、知らないうちに、日本の軍国主義者の手の内に入っていた。

しかし、アメリカ人特派員はこの問題をここで終わらせる気はなく、また、議会的な論法や戦術での雰囲気は嫌だった。我々はその日の午後に、これまで日本で受けてきた職業的及び個人的な対応についての多くの不満について話し合うために、石井報道官と面会する約束を入れた。我々は、約束時間までにアメリカン・クラブ(\*\*)から情報局に向かった。我々とは、AP通信のマックス・ヒル、UP通信社のロバート・ベレア、NBCのディック・トネリー、ニューヨーク・タイムズのオットー・トリスチャスと私。我々は劇場の舞台裏に案内され、報道官の事務所まで壊れそうな階段を上がった。補佐が出迎えてくれたが、かなり神経質だった。日本で特派員のグループによる共同的な手段が行われたのは恐らくこれが最初だろう。そして、日本人にとって、個人でも、国家でも共同的に交渉することほど嫌なことはない。

(\*\*東京アメリカンクラブ 1924年にアメリカで排日移民法が制定されたことを受け、東京クラブにいた51人のアメリカ人会員が同クラブを脱会し、独自にクラブを設立することにし、1928年(昭和3年)5月23日、在日アメリカ人が妻や恋人と楽しむための会員制社交クラブとして、帝国ホテルの向かいにあった麴町区の岩本ビルの上層階3フロアを使って設立された。Wikipedia)

我々は長いテーブルの周りの席に案内された。そのテーブルはビリヤードのテーブルのように緑のフランネルに覆われていた。石井報道官はいつものように優しそうな性格で、ニコニコと笑いながら、苦情を聞いてくれた。苦情は全特派員のサインと共に覚書として彼に渡された。覚書には検閲システムを改善し、ニュース記事送信が禁止された場合と、無線メッセージが削除された場合はそれを特派員に伝えさせることを要求した。また、これについては特派員に検閲官長と協議することを許可することを求めた。駐米日本人新聞記者の労働及び

生活環境は駐日アメリカ人特派員のそれに比べて格段に良好であることを指摘し、日本政府が少なくともアメリカ人のために必要な食事、衣服、タバコを輸入し、また、自動車を使用するために配給されている量のガソリンを購入することを許可することを要求した。経済制裁によって外国人が慣れている生活必需品の輸入は不可能になっており、日本国内には無くなっていた。日本政府は既にアメリカ人を差別し、アメリカ人にはガソリンを販売せず、枢軸国の特派員に与えられていた。彼らはまた、検閲なしで、無料で自国に電話をかけることも出来た。覚書の最後に、アメリカ人が、日本人がアメリカでは許可されている、短波ラジオ受信機を持つことと使うことを許可するよう要求した。

つまり、要求されたのはアメリカ人特派員に対する相互待遇だった。これは情報局を非常にまごつかせた。まず、日本人は日本における外国人への対応がアメリカにおける外国人の対応とは異なっていることを公式に認めたくなかった。アメリカ人新聞記者による要求は、日本における非公務的な外国人の生活環境が、他国とは根本的に異なっていることを浮き彫りにしただけだった。したがって、日本人はある特別なグループだけが異なっていることを認めたがらなかった。第二に、情報局が要求を認める前に、政府のさまざまな省庁から許可を得る必要があった。輸入する前には大蔵省から特別許可を得る必要があり、ガソリン、短波ラジオ、検閲に関する情報の要求は内務省と逓信省に持ち込まなければならなかった。

日本の官僚は排他的かつ自己中心的であり、省庁間での要求は稀で、極めて難しい事だと考えられている。一つか二つ以上の要求が確実に許可されるのは、情報局にとっては奇跡か革命が必要だっただろう。我々の短波ラジオ受信機が許可されないのはほぼ確実だった。日本は宣伝活動で日本以外に短波で大量な情報を送りつけていたが、官僚特権を除けば、日本で短波ラジオを操作しようとする日本人は皆、食事は米と水の薄汚れたネズミがいる刑務所に招かれた。当局の説明では、日本政府は国民がソビエトのプロパガンダによって誤った方向に導かれなることを警戒しているとのことだった。当局者がソビエトと取り組み、さらに、彼らと平和条約を締結するのは全く正しいことだったが、日本の素人がソビエト人と接するのは全て危険だった。説明の一部にはいくつかの真実があった。日本の支配者は共産主義の運動によって転覆されることを心から怖れていた。

石井は、民族と育てられた学びを継承してきた欠点があるにもかかわらず、ほとんどの日本人よりもずっと理性的だった。彼は要求が公正であることを理解し、日本での状況が、これらの要求が生じるまで悪化していることを心からすまないと思っていた。彼は米国で何年も住んでおり、アメリカ国民とアメリカ国民の行動を理解していた。彼は出来るだけのことはすると約束したが、我々は誰も、何かが起こると思うほど楽観的ではなかった。我々の覚書はアメリカ大使館の当局者から支援され、大使館は、日本政府によって、この依頼が許可さ

れ、それが、日本人とアメリカ人の関係改善に少しでも貢献することを願っていると表明した。しかし、こうしてもほとんど無効だった。

特派員の周りにあったのは欠乏、検閲と不毛な記者会見ではなかった。近くに、危険な人物がいた。日本人は、輸入したアイデアを、いつもの創意工夫で彼らの目的に変化し、外国新聞記者に対応したペテン師のグループを組織した。その母国では、これは空想的でハリウッドの映画の中での話だと思われており、ほとんどのアメリカ人特派員は、最初はそれが日本で起こりうるかという考えには全く懐疑的で、分かっていると笑いながら、その考えを却下しようとしていた。しかし、しばらく経ってから、外国人のコロニーに入り、行き交っている特定の男達の行動に疑いが生まれた。様々な奇妙な出来事が起こり、一つの結論に至った。それは外国新聞記者のうち、特にアメリカ新聞記者が精密に監視されているということだった。スパイや脅迫の SF 小説は米国ではスクリーンの一部などに限定されていたが、日本人はアメリカ映画を真剣に学び、元々はハリウッドの脚本作家の頭にあった不可思議なアイデア以上の重大な効果がある行動を実践した。

ペテン師のうち二人は日本に雇用された白人だった。一人は皮肉にも、アメリカ人で、今も日本にいる。彼は白髪が交じり、長身だが加齢で背が曲がっていて、こちらに30年以上住んでいて、米国には一度も帰省していなかった。東京に長期に滞在している間に、日本のお金と異国情緒と女性に依存することで、彼の弱い意識と性格は次第に行き詰った。精神的及び道徳的に完全に踏み外し、日本人と同じ考え方と行為を行うようになった。

彼はアメリカ国籍を保持し、いくつかのイギリス新聞で働いていたので、外国人の間に行き交うことが出来て、このことが日本には非常に役に立った。数年前に、大手のアメリカ新聞社の社長が日本を訪問した時に、この仲介者は社長を案内して日本の適切な「感銘」を持って帰国するのを見届けるよう委託された。1941年には他のアメリカ人が特派員交代のために日本にやってきたときは、彼は再び洗礼を浴びさせる仕事を与えられた。彼は、その言語とアメリカ国民の知識によって、初めて日本への訪問者にとっては極めて優秀な案内人であり、彼と過ごした時間が全く無駄だったわけではなかった。

彼は表向きは新聞記者として、外国特派員の記者会見に出席していた。そして、報道官が落とし穴に落ちそうになったり、困った状況に陥りそうになると、助けるのだった。一度ならず、我々が石井に多くの質問で困らせて、意見を述べざるを得ない状況になった時に、この我々の白髪交じりの友人が、毛むくじゃらの眉毛の下で目を輝かせ、神経質に右の太い脚をガクガクさせて、我々の行為を妨害した。彼は大声で当たり障りのない質問をすることで先に進ませ、話題が完全に変わることで、報道官は我々の質問に答えずに済んだ。また、石井が何かを認めてしまうと、彼がそれを大した問題ではないかのように言い換え、こ

れが報道官が「本来」意図していたことではないのかと質問し、石井はそれに常に同意するのだった。このアメリカ人のツールは記者会見の進行にも役立った。しばしば、この報道官が外国、特に米国か英国に「嫌味」を言いたい時は、それを、記者会見の進行中に自然に言うのを好んでいて、この工作員が適切なタイミングで質問を投げかけてくれることを期待していた。

二人目の工作員はさらに危険人物で、小柄でずんぐりした男で、鋭い機知と際限のない節度を欠いたジョークを持っていた。彼はハンガリーで生まれ、そこで第一次大戦での自国の境界策定に関わった多くの日本の陸軍将官と出会った。彼はその職務によってハンガリーでは殆どのけ者とされ、友達になった日本将官を通じて、日本にやってきた。そして、いくつかのヨーロッパの新聞の特派員として働き、次第に日本陸軍の諜報機関に忍び込んだ。

このハンガリー人密告者は、アメリカ人工作員よりも東京の特派員にとって極めて脅威だった。後者は日本の外務省に記者会見での補佐として雇われ、特派員に日本にとって好ましい状況を受け入れさせ、こうして彼が特派員と作った進行状況を記事にするのであった。これに対して、ハンガリー人は諜報員として陸軍に雇われ、外国人、特に新聞記者の犯罪行為をかき集めていた。最後の数年は、日本のナショナリズムの熱狂が頂点となり、外国人特派員から得た情報のほとんどがスパイの罪の証拠として解釈されつつあった。このハンガリー人には彼らと親しく交わり、彼らの有罪になりそうな情報を陸軍に提供する任務が与えられた。

彼は多くの時間を東京クラブとアメリカン・クラブで過ごし、そこにはいつもたくさんの外国人がいた。彼はランチの時には、よくアメリカン・クラブのバーのカウンター席に座り、腕に四角い頭をのせて、この間に広がる様々なざわつきから会話を見分けようと耳を立てていた。彼の興味は新聞記者に対してだけではなかった。ダイニングルームでは多くのアメリカ大使館の職員が食事をするのが習慣になっていて、彼はいつもその部屋の隅に座っていた。時々、彼は自分では気づかないうちに、見ればわかるほど目と耳を凝らして、会話されていることに集中していた。そして、興味がある事があれば、周囲をひそかに見渡し、彼が御馳走を掴んだのを誰かが監視していないかを確認するのであった。しかし、彼が如何なる人間なのかはほとんどの人々に認識されていた。結局、彼は広範囲に行き交いしているが、非常に孤独な男で、私は時々、彼が極度に陽気なのは、単に心の病を引き起こすほどの不幸を隠すためではないかと思うことがあった。

日本は特派員に対して、他にも数人の諜報工作員を雇った。その一人は、ユーラシア人技術者で海軍と関係を持っているように見えた。彼のターゲットはもともとはアメリカ人技術者達だったが、規模を拡大し、犠牲者は新聞記者にまで広がった。彼の戦術はハンガリー人の

ものと似ており、同じ目的で遂行された。

軍と文民警察は新聞のコロニーとの接触を外国人工作員だけに頼ろうとはしなかった。彼らは公認の正規職員と諜報職員を持っていた。前者は我々の事務所にほぼ毎日やって着た。微笑んでおおらかな文民警察官が部屋を出てゆくと、すぐに、陽気な憲兵が入って来るのだった。どちらも、飲んで話をするのが好きだった。2人は同盟ビルの七階が担当になっていて、ここには殆どの特派員の事務所があった。文民警察と憲兵は伝統的な民間人の淡褐色の衣服を着ていたが、自分の身元を隠してはいなかった。我々は互いを良く知り合い、質疑応答の中で、彼らの考えについて多くを知った。彼らはドイツ人とイタリア人の新聞記者にはアメリカ人よりも疑いを持っていると率直に言った。枢軸国の特派員が日本に来たのは、彼らの新聞社や機関にレポートを送るだけではなく、ドイツ大使館のために出来る限りの秘密情報を集めるためであることを、彼らは知っていた。彼らはまた、ドイツ人がずる賢く、自分の考えを隠したがるのに対して、アメリカ人は率直でオープンな性格だと思っていて、アメリカ人と一緒にいると心が休まると感じていた。このように、我々はこれらの職員とは非常に良い関係だった。特に彼らに気分爽快のドリンクをあげるときには。

しかし、正規の諜報警察にはイラつかされた。彼らは、我々が事務所にいない夜には、派事務所の机を、我々が自宅にいない昼間には、自宅を搜索しに来るのだった。自宅と事務所の電話は常に盗聴されていた。ある日、帰宅すると、キッチンの床はすでに引き剥がされ、床のボードは雑に交換されていた。

眠そうな様子をした諜報警察がホテルのロビー、バーや公共の場所に分散し、全ての外国人はスパイであり、そうでなければ日本には居ないという理論に基づいて行動していた。ソ連からやって来れば誰でも、ウラジオストクの対岸の日本の敦賀湾に下船した時点から危険人物だった。ソ連から、常駐の新聞記者としてやって来れば誰でもマークされた。そうして、1941年春にウォルター・デュランティがソ連から米国へ行く途中に日本を訪れた時、彼は自分が思っていた以上に、嚴重に監視されていた。そして、彼が去ってかなり経ってから、帝国ホテルのロビーで、大衆の人々と、警察署の目の前で、彼と同席し、ビールを飲みながら、彼の興味深いおしゃべりを聞いた我々の多くが「有罪」とされたことを知った。日本人の新聞社の友人が、私がスパイのデュランティと一緒にいるのが目撃したことをいう情報を警察から貰ったと教えてくれた。彼らは私がデュランティと共謀して、ソ連、英国、米国のいずれか、或いは三カ国全てのために活動していると疑っており、彼がこれに同意するかを知りたかったのだ。

警察はスパイを探していないときは、所謂「国家秘密」の違反者を追っていた。彼らは国家秘密とは何かを聞かされていないので、その判断は極めて困難だった。彼らは職務である外

国人の違反者を探し出す前に、その秘密を探し出すために多くの時間を費やさなければならなかった。奇妙なケースが1941年の夏に起こった。警察が、あるアメリカ人の新聞記者に近づき、私が送った話が国家秘密を漏洩したことになるかを知ろうとした。戦争勃発以前の日本が米国と最後の一連の交渉を開始する前に、私は日本が極東全域と南太平洋領域について米国に協定を結ぶよう、予備的な申し入れを開始したという記事を送った。日本人の中には同時に、日中戦争では日本が優勢であることをアメリカが確認し、その代わりにアメリカが日中戦争に対して調停してくれることを考えている者もいた。彼らはヨーロッパの戦争の進捗を見て時間を稼ぎ、原材料の備蓄量を増やそうと思っていた。そのことで、米国との貿易再開の引き換えに、南領域の現状の体制を順守することを約束するための書類を準備していた。

この記事はニューヨーク、ロンドン、ベルリンとモスクワにいる日本人新聞記者からの電報として東京に戻ってきたが、日本での報道は禁止された。海外の情報源を日本で報道することになると、国民への情報を伏せている圧政的な政府に対する激しい抗議を引き起こすことになっただろう。さらに日本陸軍は日本が米国に中国戦争の調停をお願いする兆候に激怒した。たとえ外務省と政府の他の機関がこのような考えを持っていても、軍はやるつもりはなかった。

警察の一部はこの話の発信源を探していたが、他の部署はこれが秘密暴露による国への犯罪になるかを判断するよう命じられた。ほとんどの人々はこの話については忘れていた頃、ジャパン・ニュース・ウィークの勇敢なアメリカ人発行人の W. R. ウィルズがアメリカン・クラブのラウンジに入り、私のところにやって来て、今、警察官が会いに来たと教えてくれた。警察官はウィルズに、もし、私が送った記事が本当だったら、私は罪を犯しており、警察が動くだろうが、もし、その記事が本当ではなかったら秘密が守られており、私は安全だと言った。警察は皆、ウィルズからこの話は本当なのか嘘なのかを知りたかったのだ。私が日本を去るまで警察は明らかに判断を決めていなかった。

このことで特に何もなかったが、東京からの自由な報道への警告にはなった。法律が奴隷状態な国会を通過し、特派員が「秘密」を暴露するだけでなく、日本にとって不都合な根拠が記事として海外に送られる場合も罪となった。この法律を厳密に施行することになれば、全てのアメリカ人特派員が何年間も投獄されることを意味する。なぜなら、太平洋戦争勃発前の一年間における日本政府の行動のほとんどが、米国では不評を買っていたからだ。外国人新聞記者の言論の自由を奪おうことを目的とした、まさにこの法律が報道されれば海外から大反対を受けるだけだっただろう。しかし、この法律自身は極端に無意味だからといって、新聞記者はそれまで通り、自由に書くことが出来るというわけではない。法律の適応が

曖昧であるが、逆にそのことによって、警察は長年の間、出来事を記事を書こうとして、政府を怒らせた者は全て黙らせる手段を手に入れた事が明らかになった。ウィルズを訪ねた警官はその情報が私に伝えられることを知っていた。それは、私が危険ラインに近づいていることを我々に知らせる、間接的な警告だったのだ。

警察によって逮捕と処罰を脅された結果、ロイター通信のジェームズ・コックス特派員が亡くなった。死亡は1940年、軍警察署の三階からの飛び降り自殺だったとされた。警察の方法と、スパイ活動組織、有効な検閲組織と中央集権化した無意味な情報局によって、日本政府は外国特派員たちの情報をかき集めることに成功した。しかし、我々は、これらの手段は、ある国が世界を騙すことに熱中し、いつかは世界を征服することを願って行われていることを知っていた。